

## 令和4年度 大船渡市市民活動支援事業 活動報告

団体名	一般社団法人三陸まちづくりART
事業名	『気仙丸を再び地域のシンボルに！』子どもワークショップ



### <事業概要>

千石船「気仙丸」をキャンバスとした美術によって、東日本大震災の記憶や自然と向き合うこと、地域の文化を学び育むことを目的に行った。美術家の井上信太氏にワークショップ講師をお願いし、市内の小学生の皆さんと大船渡に馴染みの深い海にある岩をモチーフとし、岩を形どった木の板に茶色やベージュのクラッシュタイルを貼り付けて作成した。

### <実施効果>

WS実施の際、気仙丸を近くで見たことのない子どもも多くいることが分かった。そんな中、自分達が作った作品が展示されることで、気仙丸を今度見に行ってみようという声も聞かれ、実際に見に来てくれた子どもたちもいた。作品を製作した子供本人はもちろん、家族ぐるみで足を運ぶ機会となり賑わいの創出に繋がった。気仙丸をキャンバスとした美術により、気仙丸自体にも注目が集まり、より深く興味をもっていた方も見受けられた。作品の前で写真を撮っている方もいたことから、関係者以外からも町の魅力を発信するきっかけをつくることができたと考える。作品を作った子どもたちや、今まで気仙丸を近くで見る機会が少なかった若年層が、「気仙丸」などの気仙の文化・魅力に触れ、知見を深めることによって、地域への誇りの醸成に繋げることができたと感じる。



本事業は、岩手県民有志の方にワークショップのサポートに入ってもらい、普段は世代間で交流の無い世代と関わることで、地域としての繋がりを生むことができ、新たな形で大船渡市の文化の発展に寄与することができたと考える。

### <今後の展開>

本年度、事業を実施したことで、気仙丸の景観を変化させていくことや、気仙丸が活用されることは賑わいを創出すると共に、地域の大きな楽しみとなり市民や企業に賛同していただくことが可能だと感じた。また、本年度は、初年度として井上信太を美術家として迎えたが、大船渡高等学校美術部や今回お手伝いいただいたサポーターの方々を始めとする美術ワークショップに興味のある方々と協働し、来年度以降のワークショップを一部分を地域スタッフ主体に開催しコストを下げることができると考えている。来年度以降のファンドレイズは、本年度の効果を知っていたら、大船渡商工会議所の協力のもと、地元企業の協賛も募っていく。

### <市民のみなさんへ一言>

先人達が培った気仙大工の技術や思いを、私たちは後世にどうやって残していけるのでしょうか。

# 地元小学生が舞台制作

## 三陸まちづくりART 10月の「気仙丸劇場」に向け

大船渡



大船渡市の一般社団法人三陸まちづくりART(前川一枝代表)は15、16の両日、大船渡町内の放課後学童クラブで、木造復元船「気仙丸」を生かした舞台発表に向けたワークショップを行った。気仙丸を自にする機会が多い地元小学生が積極的に手を動かし、三陸の

岩場を進む気仙丸を表した「劇場」成功への願いを込めた。同法人は、陸上展示から1年を迎えた気仙丸を劇場に見立てた発表を通じて、若年層を中心に船の魅力や歴史に触れてもらおうと企画。駅周辺で産業まつりが開催される10月9日(日)午後1時から16日は大船渡小内の「うみねこキッズ」でそれぞれ行われた。

両施設には、これまでも気仙で多彩な芸術活動に参加している京都府在住のアーティスト・井上信太さんらが来訪。子どもたちと一緒に、岩を模したベニヤ板に割れたタイルを貼り付けながら、交流を深めた。

うみねこキッズでは、1、2年生を中心に約20人が参加。パズル遊びのようにタイルを  
熱心に手を動かす子どもたち(電子新聞に別写真あり)

まな色のタイルを手に取り、身近な材料を生かした芸術の楽しさに触れていた。

参加した大船渡小2年の菅野悠君は「形が合うように貼るのは難しかったけど、楽しかった」と話していた。

本番では気仙丸の前に設置し、さらに海をイメージした舞台演出も加え、展示されている気仙丸が三陸沿岸を進む姿を表現。フアッシュンショーやパレエの要素を取り入れた発表を見据える。